

日本語の場面依存性の一検証

— 留守番電話の録音メッセージにおける言語形式の考察を通して —

金 河守

【キーワード】：場面依存性、相対敬語、新しいメディア、留守番電話、録音メッセージ

1. はじめに

通常、日本語は、相手とのやりとりが直接的に行われたいコミュニケーション・パターンにおいては、ふだんよりかしこまる傾向があるといわれている。つまり、手紙・電話などのような、コミュニケーションが行われる場に相手を実存しない間接的な場面においては、ふだんの言葉遣いよりかしこまった丁寧な言葉遣いになるという。

このような現象は、相対敬語である日本語の場面依存性と深く関わっているものであり、辻村(1977)にもそのような指摘がなされている。辻村(1977)は、人は面と向かって話す場合よりも電話をかけたり手紙を書いたりする場合の方が丁寧な物言いをするようであると述べており、相対敬語における使用上の条件の一つとして「場面」を挙げている。ところが、間接的コミュニケーションにおける場面依存性を裏付ける詳細な考察が行われていないため、日本語の現象として一般化するには不十分であろう。なお、言語行動のパターンが確立していない新しいメディアに対する言語行動にもそのような現象が見られるかどうかは疑問である。

留守番電話は、電話の持つ機能がさらに多様化し、新しいメディアとして登場したものである。留守番電話は、「見えない相手に話す」という既存の電話のもつ性質とともに、「電話口にいない（少なくともいないと想定される）相手に向かって一方的に話す」という今までにない新しいコミュニケーション・パターンを要求するものである。すなわち、留守番電話の録音メッセージは、間接的場面における言語行動が表れると共に今までにない新しいパターンの言語行動を要求するといった二つの要素を取りそろえているものである。既存の電話は相手が見えなくても、会話のやり取りが行われる点で話し方の調整ができる。しかし、会話のやり取りができない留守番電話は、用件を一方的に伝達しなければならないため、日常生活における会話とは違うコミュニケーション・パターンが生成されるのである。

本研究では、日本語における場面依存性の検証のために留守番電話の録音メッセージを取り上げることにする。具体的な調査の内容は、次の二つである。一番目は相手の留守番電話にメッセージを録音する側（以下、録音者）と留守番電話を設置している側（以下、設置者）のふだんの会話と録音メッセージにおける丁寧さの違い、二番目は録音メッセージの部分別（名乗る部分、用件の中心部、終末部）に表れる特徴とこれらの関連性を考察

することにする。

2. 調査の概要

荻野(1994)によると、留守番電話の設置状況における大学生の割合は、社会人家族・社会人単身者をかなり上回っている。また、留守番電話にメッセージを録音する頻度においても大学生はふたつのグループの断然優位にある。このような二点と共に、調査内容が留守番電話の録音メッセージというプライベートな点も考慮して、調査の協力者を自分専用の電話を所有している大学院生とした。調査の概要は以下の表1のようであるが、録音件数については個人差が激しく、テープの長さや録音件数は必ずしも一致するものではなく、テープの時間とデータの量の比例関係は見られない。

表1 調査の概要

調査協力者	筑波大学大学院生 (男性 3名/女性 9名)
調査期間	1994年 5月～11月 (個人差あり)
回収テープ数	60分テープ: 11個 (男 4/女 7)、30分テープ: (男 3/女 4)

3. 分析の対象と方法

分析対象は、次の三つに分けて録音メッセージの部分別における特徴を考察する。三つの部分とは、「名乗る部分」と「用件中心部における文末の形」と「終結部のあいさつ」を指す。分析対象を三つに分ける理由は、各々の部分に表れる特徴と全体にかけて表れる特徴との関連性及び違いの分析を行うためである。

分析の方法としては、録音者と設置者の直接的な場面での(公的な場を除く)ふだんの言葉遣いを基準に3段階に分け、さらにそれぞれを男女別に分ける。ここで3段階とは、①ふだん丁寧な言葉で話さない人(以下、①の関係)、②ふだん丁寧な言葉で話す人(以下、②の関係)、③場面によって言葉遣いが変わる人(以下、③の関係)の三つのレベルを指す⁽¹⁾。本研究における人間関係で親疎・上下関係を無視した理由は、親疎・上下の人間関係による留守番電話の録音メッセージの違いを見るのが目的ではないためである。ふだんの話し方と留守番電話の録音メッセージにおける話し方の違いをみるためには、上の3段階の関係設定で必要充分であると判断した。

実際の分析においては、ふだんの言葉遣いを基準としている3段階と設置者の性別、録音者の性別といった三つの要素で12通りの考察を行う。しかし、男性の設置者の録音メッセージに③の関係のデータがなかったため、10通りの分析を行うことになった。10通りの関係には、それぞれAからJまでのアルファベットを割り当て、以下それに準じてデータの説明を行うことにする。分析対象のメッセージ数は全部で292件で、女性録音者のメッセージ数が160、男性録音者のメッセージ数は132である。詳細は表2に示す。

表2 分析対象のメッセージ数

設置者の性別	女		男	
	女	男	女	男
録音者の性別と メッセージ 録音者の言葉遣い 数	147件	76件	13件	56件
①ふだん丁寧な言葉で話さない人	121 A	65 D	8 G	50 I
②ふだん丁寧な言葉で話す人	19 B	10 E	5 H	6 J
③場面によって言葉遣いが変わる人	7 C	1 F	0	0

4. 分析の結果と考察

4.1 名乗る部分

留守番電話にメッセージを録音する時に一番大事なことは、録音を残す本人がだれであるかを聞く側の人に知らせることである。ふだんの電話でのやり取りでは、親しい間柄であれば名乗らなくて済む場合や、名乗る前に相手に分かってもらえる場合もある。つまり、電話における名乗り方は両者の関係によって変わってくるのである。

両者の関係という変数は留守番電話にメッセージを残す時にはどのように働くのだろうか。ふだんの電話の頻度が少なく、しかも親しくない人の場合は、その名乗り方においてあまり大きな変化はないと考えられる。しかし、ふだん名乗らなくても済むほどの関係にある人の場合は留守番電話にメッセージを残す時にどのような行動を取るのだろうか。

名乗る部分の考察においては、次の三点に着目して分析を進める。まず、ふだんから電話の頻度が多く、しかも親しい関係の人の名乗り方はどのような傾向を示しているのか。また、その傾向は、電話の頻度が少なく、しかも親しくない間柄の人の名乗り方と比べてどのように違うのかを調べる。最後に、名乗り方における男女差はあるのかを調べる。

上の三つを調べるためには、留守番電話の録音者と設置者の関係を親疎関係と電話の頻度数で設定しなければならない。ところが、本研究の関係設定にはふだんの言葉遣いだけが変数になっている。しかし、本研究における調査の協力者がまだ学生であることが起因して「ふだん丁寧な言葉で話さない人」（本研究の①の関係）の大半が、ふだんからの電話が多い親しい友人と両親となっている。つまり、親疎・電話頻度数で関係が区別されていない本研究においても①の関係の考察結果は、ふだんの言語生活と留守番電話における違いを見るものさしとするのに充分である。名乗る部分における言語形式の表れ方の詳細については表3をご覧ください。

表 3 名乗る部分における言語形式の表れ方

番号	名乗り方	録音者の言葉遣いと分析メッセージ数		
		①の関係	②の関係	③の関係
		244	41	8
I	名字型 (です・ですけれども類)	171(70.1)	31(75.6)	6(75.0)
II	あいさつ+名字型 (です・ですけれども類)	25(10.2)	9(22.0)	2(25.0)
III	自称詞 (です・ですけれども類) (だ・だけれども類)	7(2.9) 9(3.7)		
IV	自称詞+名字型 (です・ですけれども類)	4(1.6)	1(2.4)	
V	名乗らない	28(11.5)		

()の中は、%を指す

表 3における名字型とは、録音者の名乗り方において、「名字+名前」(田中真理子です)、「名字」(高山ですけれども)、「名前」(りさ子ですけど)、「所属+名字+名前」(筑波大学の鈴木哲也ですけれども)、「所属+名前」(応用言語学の加藤ですが)のようなものを指している。また、自称詞には「私・ぼく」のような純然たる自称詞と「お母さん・お父さん」(お母さんだけれども、お父さんだ)のような親族名も含まれている。ここで親族名を自称詞に入れているのは、使用状況が自分の子供の留守番電話であるためである。「ですけれども類」は、「ですが」、「ですけど」、「ですけれど」「ですけれども」を含むもので、「だけれども類」においても同様である。

名乗る部分における一番の特徴は、「名字+です・ですけれども」(表 3の I・II)の形式を取っている割合が非常に高いことである。それぞれの割合は、①の関係で 80.2%、②の関係で 97.5%、③の関係で 100%を示している。このような傾向の②の関係においては、ふだんの話し方の影響のように考えられる。が、①の関係においてはふだんの言葉遣いと違う結果になっている。なお、③の関係においても表 3の I・IIが好まれていることがわかる。これは、相手がいないことでかしまるといふ留守番電話の特質に起因するものと考えられる。

しかし、①の関係においては、次の二点でふだんの言語行動の影響が表れている。一番目は、「名乗らない」ことであるが、これは①の関係でしか見られない。ふだん電話をかける頻度の高い①の関係においては留守番電話の録音メッセージを残す機会も多くなる。録音者は留守番電話の設置者が自分の声を覚えていると判断しているため、名乗ることを省いているのである。二番目の特徴は、録音者が設置者の名字、あるいは名前を呼びかけてから名乗ることである。その割合は 22.1%を示しており、②と③の関係では全体を通して一件しか見られなかった。相手に呼びかける例においては、「名乗らない」人の 50.0%は設置者の名前を呼びかけてから用件に入る傾向を見せている。これは、ふだんの親しさが表れているところで、①の関係特有の現象であるといえよう。この現象に関しては、男

女差が見られたが、女性 23.3%、男性 3.1%の割合で女性の方が男性より設置者の名前を呼びかける割合が高い。これは、男性より女性の方が録音メッセージが固くならないよう意識しているのだと言えよう。

4.2 用件中心部における文末の形

留守番電話にメッセージを残す第一の目的は相手に伝達すべき用件があるため、それは大概限られた時間内⁽²⁾に行われる。限られた時間内に用件を済ませるためには、簡潔かつ正確に用件を伝える必要が生じてくる。そのためには話し方の工夫が必要になるが、その工夫はどのように行われるのだろうか。

荻野(1994)の調査では、メッセージを録音する際に注意を払うこととして、「なるべく手短かにいう」というのがどの年齢層でも多く見られた。その他に「改まった読み言葉にならないようにする」と「くだけた話し言葉にならないようにする」というようなものもある。しかし、その割合は全体の 5%にも満たないもので、被調査者のほとんどが注意を払っていないことになっている。意識調査の結果と実際の行動における違いはないのだろうか。ふだんの言葉遣いにそれほど気を使わない①の関係の場合、「手短かに用件をいう」場合でもふだんと変わらない話し方をするのだろうか。

そこで、用件中心部においては「文末の形」と「文の長さ」の二点に着目して考察を進める。文末の形に関しては丁寧さを表す助動詞の有無を基準に分析を行う。つまり、丁寧さがマークされている助動詞で終わっているものと丁寧さがマークされない動詞・形容詞・名詞などの基本形で終わっているものの二つに分けて考える。これは、本研究の目的が文末に表れる終助詞の種類およびその使い方を見るのではなく、ふだんの言語行動と比べて録音メッセージにおける丁寧さがどのように変わるのかを考察するのが目的だからである。また、文の長さに関しては文節と拍を数え、「手短かに用件をいう」と意識していることへの検証を行う。まず、用件中心部の文末の形の詳細については表 4 をご覧いただきたい。

表 4 用件中心部の文末の形

番号	録音者の 言葉遣い 文末の形	①の関係	②の関係	③の関係
		793	125	40
I	です・ます類	480(60.5%)	101(80.8%)	37(92.5%)
II	下さい	101(12.7%)	15(12.0%)	3(7.5%)
III	あいさつ類	53(6.7%)	5(4.0%)	
IV	非です・ます類	156(19.7%)	4(3.2%)	

表 4における「ます類」には「ます、ました、ません、ますか、ましたか」のほかに、「ます」+接続助詞、終助詞が（お電話しますので、連絡しますけれども等）「です類」にも「です、でした、ですか、でしたか」と「です」+接続助詞、終助詞（よろしいでしょうか、明日ですよ等）がそれぞれ含まれている。また、「あいさつ類」には「ありがとう」、「すみません」、「ごめんなさい」などが入っている。

以上の集計結果から、どの関係においても文末の形に丁寧さがマークされている方の割合が高いことが分かる。それは、各関係において約 7割を示しており、①の関係においても適用されているのである。ふだん「デス・マス体」を使わない①の関係の場合は「名乗る部分」に見られた現象と同様の結果になっている。これも、留守番電話の「その場に相手がいなくて、その場で相手の反応が返ってこない」という性質が原因でふだんよりかしまった話し方になることと考えられる。

しかし、①の関係にある録音者は設置者に対してふだんは使わない丁寧な言葉を用いるわけだから、②と③の関係では見られない要素も入っている。その要素として挙げられるのが「非です・ます」の使用率と「非です・ます体」における接続助詞と終助詞の使用度である。まず、「非です・ます」使用に関しては、その割合は表 5にもあるように 19.7%を示している。全体の割合から考えればそれほど高くない数値であるが、②と③の関係においてはまったく見られないものである。これはふだんの話し方が要因として働いていると考えられる。ところが、動詞の終止形あるいは形容詞の終止形で終わっているのは「非です・ます体」のわずか 17.3%にすぎない。一方、「けれども」の接続助詞の使用率は、23.7%を示しており、その他は「ので」や「で」などの終助詞のついた形で終わっている。

①の関係にある人が「非です・ます体」の使用においても言い切る形を避けているのはどうしてなのだろうか。それは、言い切ることに伴う文末表現選択の回避現象の表れであろう。言い切ることは文末の形を選ぶこととつながるため待遇価値が出てしまう。そこで録音者は待遇価値の出ることを避けるために言い切らない長い文を発するようになる。

ここではその検証のため、文の長さを測定してその結果を文末の形の選択理由と照らし合わせてみることにした。文の長さを計る方法としては文節数を数えてそれぞれの平均値を求める方法を取った⁽³⁾。その結果を表 5に示す。

表 5 文の長さ

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J
全文数	391	57	38	225	38	2	23	14	154	16
文節数の平均値	5.22	7.41	7.54	5.28	6.43	9.00	5.09	5.35	6.14	7.25
一文の最多文節数	20	20	27	33	19	12	15	11	26	16
拍数の平均値	24.4	34.7	30.6	24.0	30.4	33.5	24.3	27.0	27.3	33.4
一文の最大拍数	96	83	87	103	91	42	64	57	121	80

表 5の結果だけを見ると①の関係におけるA、D、G、の場合は、他の関係より文節数とともに拍数が少なく、結果的に文の長さが短いことになる。これはどのようなことが起因しているのだろうか。全文の文節数と拍数を比べるには、各々の関係においてのデータの量とデータの質にかなりの差があったことが一番の原因であろう。たとえば、②の関係においては、くりかえし電話番号を言ったりしていることが文節数と拍数を増やす一役を担っている。結果的に、①の関係の文の長さが他の関係に比べて長いことを証明することはできなかったが、むしろデータの量と節の問題を無視して平均値を求めることへの危険性を認知することができた。

以上、用件中心部における文末の形を中心に考察を行ったが、名乗る部分の言語形式の特徴として表れた丁寧さが、用件中心部においても同じように表れている。ふだん丁寧な言葉で話さない人でも録音メッセージの用件を言うときには、非常に丁寧な話し方になる。これは、録音メッセージを簡潔にまとめようとする意識と「相手がない」ことが起因しているのだろう。荻野(1994)の意識調査の結果にはそれほど明確には表れなかった丁寧さの問題については新たな結果が検証できたと考えられる。

4.3 終結部のあいさつ

会話の開始部と同様にどのように話を終結させるかも重要である。うまく話をまとめて会話を終了させることは人間関係の維持にも関わることなので、ふだんの会話においてはお互い気をつけながら終結部に向かうわけである。ところが、留守番電話の録音メッセージにおいては用件の伝達が終わったらさっそく終結部に入らなければならない。しかも録音者単独で行われることなので、ふだんの会話における終結とは違う要素が入るはずである。単独で話をまとめるときは、その内容によってまとめ方も変わってくるのである。荻野(1994)の調査でも、留守番電話にメッセージを残す際の心理としては「連絡や用件の伝言」のような使い方のほかに「ちょっとしたことでも伝えるためのもの」が挙げられているので、話のまとめにおいてもさまざまな傾向が見られるはずである。

終結部のあいさつは大きく八つに分けられる。各々は「じゃね類」(じゃね、バイバイ)・(それじゃ、またね、バイバイ)・(それじゃ、さようなら)、「電話します類」(また電話します)・(また連絡します)、「連絡下さい類」(また電話ください)・(じゃ、帰ったら電話ください)、「失礼します類」(それじゃ、失礼します)・(では、失礼いたします)、「お休みなさい類」(それでは、お休みなさい)・(じゃ、また、お休みなさい)、「お願いします類」(では、お願いします)・(それでは、また、よろしく願います)、「謝罪類」(ごめんなさい)・(どうもすみません)、「以上類」(では、以上)・(以上です)に分けられるが、とりわけ終助詞の使い方の多様性が非常に目だつ。特に、「じゃね類」では「ね」という終助詞の使い方によってさまざまな言い方が生じている。

ここでは、留守番電話の録音メッセージの終結部におけるあいさつのパターンとふだんの言葉遣いによるあいさつの類型を考察する。次の表 6で終結部のあいさつの詳細を示すことにしよう。

表 6 終結部のあいさつ

番号	録音者の 言葉遣い 挨拶の形	①の関係	②の関係	③の関係
		212	38	8
I	じゃね類	148(69.8%)	8(21.1%)	2(25.0%)
II	電話します類	14(6.6%)	2(5.3%)	
III	連絡下さい類	2(0.9%)		1(12.5%)
IV	失礼します類	14(6.6%)	15(39.5%)	1(12.5%)
V	お休みなさい類	4(1.9%)	4(10.5%)	
VI	お願いします類	9(4.2%)	8(21.0%)	1(12.5%)
VII	謝罪類	2(0.9%)	1(2.6%)	
VIII	以上類	12(5.7%)		3(37.5%)

①の関係にある若い女性は、「じゃね、バイバイ」を使う割合が高く、「じゃね類」の 18.9%を示しているが、②の関係においては一件(12.5%)しか見られなかった。①の関係にある若い女性がふだんの会話と同様「バイバイ」で終わっているのは名乗りの部分で「名乗らない」現象と似ている。①の関係は用件中心部における待遇表現を終結のあいさつでもって和らげ、最終的にはふだんの人間関係にもどってメッセージの録音を終えている。それは、「名乗る部分」にも現れた現象であるが、導入部と終結部で改まりすぎをコントロールしているからであろう。

「お願いします」と「すみません」は、留守番電話に入れる内容と密接な関係があるため、ふだんの会話における終結部のあいさつとは違う結果が見られた。録音者の男性の分析結果に関しては、データの量が少なかったため、一人が好んで使う形がそのまま傾向のように解釈される危険性を持っていることも断っておく。この問題に関してはデータの量を増やして録音者の多様化を図る必要があるだろう。

5. まとめ

ここまで日本語の場面依存性の検証の一つとして留守番電話の録音メッセージにおける言語形式を考察してきたが、それらを項目別にまとめると次のようになる。

まず、録音者の全体的な話し方においては、設置者に向けてふだん丁寧な言葉で話さない人でもふだんよりかしこまった形を取っている（約 7割）。ふだんから丁寧な言葉で話す②の関係においては留守番電話の録音メッセージも当然丁寧な話し方になっている。

次に、名乗る部分においても①の関係における丁寧さの表れは同様である（約 7割）。しかし、録音者が①の関係の女性である場合は相手に呼びかけてから名乗るのが特徴的である（約 2割）。とりわけ若い女性の場合は「名乗らない」、「相手に呼びかける」ことでメッセージの全体的な話し方が改まりすぎるのを防ぎ、親密さを相手に伝えようとすることが分かった。「名乗らない」傾向は、①の関係だけでしか見られず、②と③の関係においては見られなかった。

また、用件中心部の文末の形においても①の関係における丁寧さの表れは名乗る部分とほぼ同じくらいである（約 8割）。ところが、丁寧さがマークされない文末の形においても言い切らないものが多いため全体的な丁寧度はもっと高くなるのである。

最後に、終結部のあいさつに現れる言語形式は、①の男女ともふだんの会話で用いている「じゃね類」の使用が断然多いが（6割以上）、電話の内容によるばらつきもある。電話の目的が依頼とか謝罪である場合は、「お願いします」、「すみません」などで終わっている例もあった。

以上の点から言えることは、日本語においては、ふだん丁寧な言葉で話さない人でも、相手とのやり取りがその場でできないコミュニケーション・パターンにおいては、ふだんよりかしこまる傾向があることが証明されたということであろう。日本語における「場面依存性」は、言語行動として確立していない新しいメディアにも表れており、それは相対敬語を成り立たせるものと深く関わっていることが分かった。

相手とやりとりのできない留守番電話の録音メッセージは、相対敬語における場面的条件がみたされないコミュニケーション・パターンの一つであるが、時代の発達とともにコンピュータ通信などの間接的コミュニケーションが増えつづけている。これらの新しいコミュニケーション・パターンの定着にも場面依存性は深く関わっていくだろう。

最後に、相対敬語の場面性による丁寧さの問題は絶対敬語における場面性と比べてみるとその性質はなお明確になると考えられるが、それはこれからの課題にしていきたい⁽⁴⁾。

<注>

(1) 録音者の設置者に対する言葉遣いは、録音者が設置者に対してふだん「です・ます体」で話すかどうかを基準に判断してもらってのものである。

(2) 留守番電話の機能と設置者の時間選択にもよるが、大体の留守番電話における録音メッセージの録音時間には制約があると見なしている。

(3) 文節の数え方においては、国研(1955)と石田研究室(1993)の報告集を参考にしている。

電話番号は、5/2/の/0/0/0/7のように数えている。

(4) 絶対敬語である韓国語の場合においては(筆者の経験によるもので統計的な根拠はないが)、留守番電話の録音メッセージにおける丁寧さはふだん言葉づかいにおける丁寧さと変わらなように思われる。絶対敬語の韓国語は人間関係(特に年上・年下関係)によって言葉遣いが決まり、常にお互いの関係を維持しようとするため、言葉遣いに変化があることには非常に抵抗を感じるように思われる。

<参考文献>

石田研究室(1993)「講義の日本語における理科系・文科系の特徴Ⅰ—1991年度の報告」

石田研究室報告集

荻野綱男(1994)「情報化と言語行動変容」『高度情報化社会における人間行動の変化』

科研費報告書

向後千春(1993)「留守番電話はなぜかけにくいのか」現代のエスプリ 306

国立国語研究所(1955)『談話語の実態』秀英出版

柴田 武(1992)「留守番電話という相手」日本語学 Vol. 11, No. 10

辻村敏樹(1977)「日本語の敬語の構造と特色」『岩波講座日本語 4 敬語』岩波書店

野元菊雄(1985)「電話とコミュニケーション」言語生活 No. 407